魔法使いの女子高生

望月祐里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法使いの女子高生

【Ｎコード】
Ｎ１９２６Ｏ

【作者名】
望月祐里

【あらすじ】
ちょっとした事故が元で飛ばされた先は現代！？
いわゆるファンタジー世界の魔法使いさんが現代文明に悪戦苦闘する物語。

※残酷描写は不明ですが転ばぬ先の杖ということで…

第0話　プロローグ（前書き）

こっちから向こうに行くのがたくさんあるけど、向こうからこっちならどうなんだろうってのが元の発想です。
言うまでもなくこっちから向こうへの多くの物語、ニコ動の東方の現代入り等数多くの影響を受けてます。
（誤解されそうですけど、中身はオリジナルですよー）

第0話　プロローグ

少女は驚いていた。というより、どう感情を出せば良いのか分からないで居た。
見上げれば巨大な建物らしきものが並び、空は狭く、見下ろせば不思議な箱のようなものが凄まじい速さで動いている。
向かう人々は慌しく、自分の顔を見ても反応も示さない。
「なに、これ…？」

話は少し前に遡る。

「おはようございます、所長」
「みんな、おはよっ」
白衣を着た研究者達に少女は挨拶を返す。
ここはスプリングウインド雷晶石研究所。魔晶石の一種である雷晶石について研究する施設だ。

「おはようございます、ヒカリ様。本日はお早いですね？」
眼鏡をかけた男性職員が少女に話しかける。
「だって今日は新型回路の公開実験でしょ？」
肩をすくめながら答える。
「それと昼過ぎからは宮廷魔術士会館で報告会儀です。」
「うげ、あれもだっけ？面倒ねぇ…」
「お気持ちは分かりますが…」
「…分かってるわよ。狸にみんなを路頭に迷わさせたくなんてない

し。」

少女の名前はヒカリ・スプリングウインド。
17歳にしてこの国の研究所の所長、そして宮廷魔術師団第六席。
だが、性別や年齢のみならずその性格ゆえ部下からの信任は厚いものの大貴族(たぬき)からは疎まれる。
それさえも弾き返し、この地位を得る彼女は時折こう呼ばれる。
「魔法使い」と。

「で、回路のほう、セッティング終わってる？」
「えぇ、今朝方終わらせてあります。」
「ん、分かった。ちょっと見てくるね？」
「了解しました。」

公開場所は表口を出てすぐの広場にある。
広場の四分の一ほどの大きさの円形に一方向に術が向かうように調整されたいくつもの雷晶石があり、中央にはミスリルで作られた大きな皿のような反射板が中央に術が集まるように置かれている。
これが雷晶石によって火属性魔術を擬似的に発生させるための回路。
この回路によって魔術の発生という大きな謎に迫れるはずの革命的な代物。
（これで私は…）

その時、カチッと小さな音がした。
不審に思い振り向くと猫が居る。発動装置に前足をかけて。

「っ！？」
今、ヒカリが居るのは回路の中央部分。
「インスタントマジック…イージス！」
ヒカリは少し慌てて防護魔法を張る。
回路が発動する。だが、様子がおかしい。
まるで何か得体の知れないものが形作られるというか…
「げ…干渉してるんじゃ…」
気づいた時には遅かった。反射する魔力が何度も複雑に干渉し、
あっという間に眩い光が辺りを包んだ。

第0話　プロローグ（後書き）

素人の初挑戦、どこまでいけるか分からないけど目標は完結です。
生温かく見守っていただけると喜びますw

第1話　出会い

「なに、これ…？」
もう一度ヒカリは言った。
言ったところで何かが変わる訳でも無いが、言わずには居られなかったのだろう。

とはいえ、いつまでも放心しても居られない。
とりあえず状態を把握しなければならない。

周囲の状態は？
先程見たとおり。全てが未知の物だと言って良い。
ここに至った原因は？
おそらく魔力の超干渉。
何が起きた？
全く分からない。

見事に当てにならない情報ばかりである。
ただ、人の多さや装備の様子からここが街であることだけは間違いない。
（通常は救助を待つべき何だろうけど…危険は少なそうだしいいかな？）

結論から言えば問題は無かったが、別の意味で問題だった。
別に危険なことがあったわけではない。安全であることは間違いない。
四角い箱もそこから人が出入りしているところからして馬車のようなものであったし、市場以上の人通りなのにも関わらず金目のも

のを奪う輩すら居ない。
おまけに、時折「てれび」だの「ぱそこん」だのよく分からない言葉があるものの、概ねの言葉が理解できることが通りすがりの会話で分かっている。危険性といった点では最初に思っていたよりもずっと安全なのかもしれない。

だが、現在位置が分からない。少なくとも王都にこんな場所は無いし、大陸全土を探しても存在しないはずだ。ますます意味が分からない。
（…物語の世界にでも飛ばされたのかしら。）
だんだん阿呆らしくなって現実離れした思考にシフトしていくのだった。

今日の少女はものすごく不運だった。
（やば…こりゃ遅刻かも…！）
全力で駅に向かって疾走するが携帯の上部に表示される数字は８：０４。間に合う電車は４分後の一本だけだ。
そもそも、朝からおかしかった。
いつもは１０分しか動かない起床時間が今日に限って３０分も遅く、家を出ると絶対忘れない財布を置いてきてしまい取りに戻る羽目になり、飲み物を買うために入ったコンビニから出ると自転車が壊れた鍵だけになっていた。
いまどきギャグ漫画の主人公でもここまで不運は重ならない。
そしてその思考に没頭する１秒の間に不運のとどめが目の前に迫っていた。物理的に。

「「きゃっ！」」
と二つの声が重なり転げる。
「いたたた…大丈夫ですか？」
とりあえず無事を確認するために声をかける。
後から思えばこれも失敗だった。

「あ、はい。って…え？」
目の前にあったのは自分と瓜二つの顔。
（んと…ドッペルゲンガー？）
この瞬間、少女　春風秋名（はるかぜあきな）の皆勤記録が途絶えることが確定した。

第1話　出会い（後書き）

とりあえず、これで主人公は両方登場です。
名前の件は敢えて被せてます。安直って素晴らしい（何
１０／９　速攻で一部修正ｏｒｚ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1926o/

魔法使いの女子高生

2010年10月9日22時20分発行